

第五十五回（平成二七年度）国際理解・国際協力のための全国中学生作文コンテスト

● 応募テーマ：「創設70周年を迎えた国連のこれからの使命」

東京都大会金賞受賞 目黒区立第十中学校 1年 村田 主喜

「僕には帰る家がある。帰る故国がある」

僕は一歳の時から、写真家の母と毎年春休みに、シリアの沙漠に住む遊牧民、ベドウィンの家族と暮らしている。家はヤギの毛で織ったテントで、電気もガスも水道も僕たちが日本で生活する上で欠かせない物が無い。引越しの時は家も服も生活道具も人も、すべて一台のトラックに入ってしまう。高価な物、便利な物を沢山持っていることが豊かだと思っている僕たちよりはるかに少ない物しかないが、必要以上に物に依存せず、思いやり深く、豊かな心で暮らしている。アラブと言うと危ないと思っている人が多いがそれは違う。逆にいつも彼らは僕たちのことを守ってくれた。たとえば、ある日ベドウィンの友人と沙漠を歩いていたら、突然羊の番犬が猛スヒートで僕に突進して来た。その瞬間、友人は僕の前に出て両手を広げ僕をかばってくれた。

でも四年以上ベドウィンの家族と会っていない。シリアに紛争が起きてしまったからだ。

二〇一一年三月、沙漠からアレppoの町に戻ると様子が一変していた。家々の窓から以前にはなかった国旗が垂れ下がり、小旗を振りながら歩く人々が行き交う町の空気はザワザワとしていた。でもその時は今のような状況になるとは思わなかった。国が二分化してしまった。ベドウィンの家族も兵役に行っているのだから付いている。また、他国の人もシリアで争うことで、状況はより複雑になっている。国外難民四〇〇万人。国内避難民七六〇万人。死亡

者二三万人。

では、このような状況をどうすればよいのだろうか。それには国連の果たす役割が大きい。

国連の第一の使命は国連憲章にある通り、「国際の平和及び安全の維持」だ。でも、第二次世界大戦終結から七〇年が過ぎた今も、世界のどこかでいつも争いは起こっている。戦争は終わっていないのだ。国連がその使命を果たすには、粘り強い交渉や各国への働きかけが必要だ。

様々な問題があると思う。だ

が、優先すべきことの一つは、今も続いているシリアの紛争を止めることだ。

そのためには世界中の人々にシリアの現状を知ってもらう必要がある。壊された建物、血を流し病院に運ばれる人々、泣き叫ぶ人々、苦痛な顔、涙、難民キャンプの様子。沢山の人が犠牲になり、沢山の涙が流れた。皆国を愛し、良くしたいという思いは同じなのに、考えや信じるものの違いで憎み合っている。

しかし、このような姿を前にして僕はイソップ童話の「北風と太陽」を思い起こす。北風のようにシリアの苦しみ、痛みを吹き付け、広めることで争いと言う服を脱がせるのもいい。けれども僕はシリアの素晴らしさ、陽光のような温かさを広めて、憎しみと言う服を脱がせたい。僕らの心にあるシリアは、広大な沙漠に昇る朝日、高く青い空、羊の鳴き声、沙漠をサクサク歩く音、地平線に落ちる夕日、満点の星々だ。そして皆と飲んだシャイイという甘い紅茶、一緒にサッカーをした笑い声、

沢山の笑顔。それは互いをいたわり、思いやり、助け合い、人と人の距離が近い、大きな家族のシリアの姿だ。人は残酷な場面や写真に目を背ける。でも明るく輝く平和な場面や写真は見飽きることはない。僕は伝えたい！知ってもらいたい！そんな姿をこそ。

たしかにシリアの町の風景は変わってしまったかもしれない。人々の心は傷付き変わってしまったかもしれない。でも僕が見上げた空は同じ空で全ての人々とながっている。そして、僕の言葉はきくと伝わる。なぜなら言葉の力を信じているからだ。僕一人の声は小さくて聞こえなくても、何人が集まれば大きくなる。それがどんどん広がってもっと大きくなる。国連はその声を集め、きくと世界に広め、伝えてくれる。全力を尽くしてくれる。太陽のように世界を照らす希望の光と共に。

「僕には帰る家がある。帰る故国がある」

シリアの友人たちもこう言える日が一日も早く来るように、僕自身も陽光になりたい。